気がつかれた世界系

山波太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気がつかれた世界系

【Ｎコード】
Ｎ１３５２Ｌ

【作者名】
山波太郎

【あらすじ】
主人公：洞下基紀は人よりだいぶ霊感が強い。大多数にとっての非日常を日常する、そんな主人公のお話。

ミサキとの遭遇（ｘｘ回目）前編

日曜のちょっとしたドライブのつもりが、ちょっとどころでない遠出になってしまった。帰るころにはとうに日が暮れ、辺りは真っ暗。そんな山道で一人、ハンドルを握らなければいけなかった。

このまま何も起こらなければ、出遭わなければいいけれど。しかし、そんな不安はドシャがつくような降り方をする雨に視界を奪われ始めたころ、的中してしまったわけである。

ミサキに出くわしたのだ。今にして思えばその雨は、ミサキが僕を引き込もうと降らせた雨だと、そう思った方が納得のいくものだった。

そいつ、ミサキはいきなり現れた。僕の車が走るのと反対の車線、転落防止に張られたガードレール側の車線にぽうと光ったような白い影が映った。まるで雨がそれを避けているかのような、そんな風にその存在は不気味に、際立って見えた。遠くを見ることのできない視界の中、すれ違いは一瞬だった。その一瞬に僕とそいつは目が合い、そして次の瞬きのうちに、そいつは僕の車の助手席にいた。瞬間移動もいいところである。そいつをミサキだと認識したのはその時であった。

取り憑かれる。そう思った。実際ミサキは人に取り憑く存在なのだし、だからその発想は間違いではない。そしてそれは、間違ってはいなかった。

ミサキは助手席から両腕を伸ばし、僕の体に絡みつくように近づく。ボサボサと伸びた黒髪にただ五つの穴が空いているだけのような顔。カーナビの灯りに照らされて、青白い顔はもっと青く白い。とてもじゃないが直視できない。それを僕は左の腕で必死に掃い、祓いのけ、取り憑かれないようにする。ほんの一つ意識をとりこぼしただけで、引きずり込まれる。そんな綱渡り。

しかしそれでも、ミサキばかりに気をとられるわけにはいかなか

った。外は豪雨、しかも山道。一瞬のハンドルミス、フットワークミスがそのまま物理的な死に帰結する状況である。車を止めればいい、なんて思う余裕などなかった。僕は知らず知らずのうちにパニックに陥っていたのである。まあ、パニックなんてものは自覚していればそれは本当のパニックではない。

とにかく僕は、その二つの板挟みの打開策として、何の希望も開けないままに、口を開いたのである。

「待て待て待て待て？　待ってくれ！　きっと違う。そう違う、人違いだ。僕はお前の思っているようなやつじゃない。お前が恨んでいるのは僕じゃない。そうだろう？　だからお願いだ、待ってくれ！」

それはもう、自分が今までしっかり日本語を学んできたのか疑いたくなるほど稚拙な言葉の繰り返しだった。

そんなことではもちろんミサキが止まるわけはない。依然忘我のままに、僕に取り憑こうとする。それでも僕は、口を閉じることはできなかった。自分はここにいるのだと必死に自身に主張して、現世に留まろうとする意志の表れ、かもしれなかった。

ミサキが僕の喉を捕らえ、そして本格的に引き込みを開始した。

「まて、まて、まて！」待てという言葉を連呼しすぎてその意味をなくしたころ、僕はそれこそ無自覚のままに意思の方向転換を試みた。と言いたいが、本当に、よく分からない。「話なら、話なら聞いてやる！　だから、ほんの少しだ！　その話を聞いてからでも、取り憑くのは遅くない！　そうだろう？」

本当に何を言っているのだろうか。自分で言っておきながら、それは言った後で自覚した。

ミサキは、ただ人に憑くだけの存在だ、と誰に教えられるわけでもなく、そう経験してきた僕が、そんなことを言う。歩み寄ることはこの上なく危険だというのに、自ら飛び込む。ああもう駄目だ。そう思った。

『……ほんとうに？』

だから、その返事をもらったことについて、その事実とともにその内容によって、僕の思考は停止した。いや始めから、まともに動いていたなんてことは言えないけども。

雨音さえも停止したかに思えた刹那の出来事。それはやはり刹那で、僕が呆けているとミサキはまた、クッと、首を絞める気配を見せた。嘘つきと言われた気がした。

「嘘じゃない！　本当だ！」

『……そう』

ミサキは腕を僕から離し、助手席に大人しく座った。僕は首の調子を触って診てから、正面を向いて両手でハンドルを握った。車を止めた方がいいのか迷ったがそのまま走らせた。今度は違う意味で、意識を分散した方がいいと思ったのだ。つまり歩み寄りすぎないための保険である。

そしてワイパーが忙しなく動く、車の中、聞いてほしい話があるはずのミサキは、一向に話を始めなかった。

ミサキとの遭遇（ｘｘ回目）後編

どうして話を始めないのか。けたたましい静寂の中、気まずさとともにそう考えた。ミサキはずっと自分の膝の位置を見つめたままである。

まるで、訊かれたそうにしているのである。

自分は愚鈍なのか。いやこうして気がつけたのだから、そうではないとそう思う。そして、しかし、気がついたところで、どうしようか迷う。ほんの少しでも、こんなところから意思疎通が困難なのである。その舵取りはおそらく僕がしなければいけないのだろう。つまりは、歩み寄ることである。危険だ、危険だ。思考がループする。

その螺旋を深呼吸で沈め、意を決する。このままでもいづれ夜は明けるが、約束はしたのだ。してしまった。愚直に待ち続けるこのミサキに嘘を行うことは難しかった。深呼吸は、溜め息かもしれなかった。

「あんた、名前は？」

『……ミサキ』

「じゃなくて、あんたの本当の名前」

『……名前も、ミサキ』

ああ、そう。ややこしい。そう言ってしまいそうだった。が、それはこちらの都合だ。ミサキにとって、これは関係のないことである。舵を補正、咳を一つ。

「どうして、死んだ？」

『……事故』

「不慮の、ってやつか？」

『……』

「……」

……補正。

「ミサキ。生きている人間が憎いのか？」
『……憎い』
「それは自分が死んでいるから？」
『…違う』
「お前の言う、人間って誰だ？　本当に生きているやつ全員なのか？」
『……しょーじろさん』
「……え？」
『……庄次郎さんが……』
憎いのか。
「それは誰？」
『……私の、婚約者だった……』
雨がより一層、強くなった。
『庄次郎さんは、私の婚約者だった。庄次郎さんは次男だった。……だからよかった』
「なんで、次男だといいの？」
『家を……継がなくていいから』
旧時代的な話である。そんな気がした。
『だから、結婚しよう、て言ってくれた』
二人は恋愛の末、結婚を決意した。
『でも、駄目だった』
それはなぜ？
『私が、駄目だった』
……それはなぜ？
『私が、いい家柄じゃなかったから』
だから、それはきっと、庄次郎の――。
『家族が、反対した。私と、庄次郎さんの結婚を、反対した』
よく聞く話だ。悲劇では特に。
『そして、庄次郎さんも、反対しだした。親には逆らえなかった。逆らってくれても、よかったのに』

ミサキはもう一度、よかったのに、と繰り返した。逆らってでも、私を娶ってほしかった。そう聞こえた。
それから。
『だんだん……だんだん、会わなくなって』
それでも私は思い続けて。
そうこうしているうちに。
庄次郎さんが――。
『お見合いを……するって……』
言ってきて。いや、風の噂で聞きつけて、か。
『私……どうしても、どうしても、会いたくて。……夜に』
会いに、行った……のか。
『嵐が来てて、でもどうしても、会いたくて……』
それは今のこんな天候だったのだろうか。もう、いつどこの崖が崩れてきてもおかしくない、そんな天候だったのだろうか。
『会いたくて』
でも。
『会えなくて』
代わりに、私は――。
『……死んでしまった』
ミサキはここまで言って、しばらくの間押し黙った。それを僕は沈黙を以て応える。舵はこのままでいいと思った。
でも、それは違うのだ。
核心はここからなのだから。
「どうやって死んだ？」
『飛んできた……木に刺されて』
「どこで、死んだ？」
『庄次郎さんの、家の前』
それは、その光景は、当事者からしてみれば、最上級のあてつけであったことだろう。
『私、そんなつもりじゃ』

「わかってる。わかってる……けど」
周りはそうは見なかった。ここでいう周りとは、村だか町だか知らないけれど、周辺に住んでいた住民全てだ。
でもそれでも、そんなことよりも、そんな人たちのことよりも。
『庄次郎……さんが……』
そんな目で見た。そんな目で、見てしまった。
私はそんなつもりじゃない。そんなつもりじゃなかった。
私は――。
『幸せに、って、言いたかっただけなのに』
その言葉の真意には、皮肉のほんのかけらも入るはずはなかったはずだ。でもそれは、色々と間違えた。
色々と間違えて、屈曲して、それでもそれは、正せずに。それはきっと、悔しくて。
だからこそミサキはミサキになった。
そして今も、ミサキはミサキのままだった。
「ミサキ」僕は改めてその名を呼ぶ。ミサキという、その者の名前を呼んだ。「質問がある」
視線は前へ。有無を言わせる余地は与えない。
「今も、いや最初から、庄次郎のことを恨んでいたのか？」
ミサキも同じく前を向いているようだった。近づき続ける風景を、黙って、見ているようだった。
雨はいつの間にか止んでいた。
そしてミサキは口を開いた。そして、違うと言った。ただ本当に悔しかっただけなのだ、とそう言った。
夜が明けて、そしてミサキは消えていた。

日の出を正面に捉え、そのまぶしさに目を細めながら、自分がいかに危うい行いをしたのかを思い知る。ミサキに遭遇したのが夜の十一時。そこからミサキと一緒にいたのが、体感時間でせいぜい一時間ほどだった。それが実際の時間で五時間以上経っていた。本当

に引き込まれそうになったのだ。
山を下りて、麓にあったコンビニで眠気覚ましのコーヒーを買う。休憩がてら車の中でそのコーヒーを飲みながら、先ほどのミサキのことを思った。
生前においても、死後においても、伝わらないことがある、というのはそれだけで不幸なのだろうか。
僕の記憶に住んでいる彼が言う。ミサキは救われない。救いがない。過去という意味でも、未来という意味でも。ただ人を引き込むだけだ。だからこそ、被害者なのだ。その成り立ちを知られていながら、それでもなお嫌われなければならない。そして嫌わなければならない。救えないから。
助かっておきながら、僕はあのミサキがどうして消えたのか、それが知りたくなった。
あのミサキは、救われたのだろうか。報われたのだろうか。
ただそれだけが、気になった。

呪うＯＬ　其の一

日が昇って朝。ぼくはひたすら眠かった。眠気を覚まそうといつもより熱めのシャワーを浴びたところで、それは逆効果だったということに今さらながら気がついた。

眠い。果てしなく眠い。もしこのまま布団に包まることができたなら、それはどんなに幸せなことだろう。けれど僕はそれをしない。それはできない。会社に行かなければいけないからだ。さよなら布団。かまってあげられなくてごめん。スーツに着替えて革靴を履く。

それが社会に生きるということ。社会で生きるということ。……社会に埋もれる、とも言うけれど。

「お前今日、死んでるな」

十一時ごろだ。暑苦しく野太い声でそう言われた。パソコンに向かっていた身体をよじって後ろを向く。言ったのは同期の川島雄大だった。川島はスポーツ系の学部出身で、なぜ体育教師になっていないのか不思議なくらいジャージと竹刀が似合いそうな風体、雰囲気をしている。

「今はまだ、死んでない」

川島のそういった雰囲気と真逆を行く僕と、そんな彼とが仲がいいのは考えてみれば奇妙というか意外というか。もっとも川島は僕なんかよりよっぽどオープンで交友関係も広く、川島からしてみれば特別仲がいいというわけではないのかもしれない。それでも川島と一緒にアフターを過ごす割合は僕が一番多かった。

「まるでこれから死ぬみたいな言い方だな。どうした？　どっか悪いのか」

「いや、悪いわけじゃないよ。ただ猛烈に眠いだけ。一睡もしてないんだよ、昨日から」

「どうしたんだ？　何かあったのか？」

「ちょっとドライブしようと思ってね。最近遠出してなかったし。それで道に迷った。で、朝になってやっと帰ってこれた、ていう、ね」
事実を述べればそれはとんでもなく間抜けな話だった。
「どこまで行ってきたんだ？」
「三ケ田」
普通ならば、どんなに安全運転でも二時間半で行って帰ってくることのできる距離である。だからこそ僕は行こうと思ったのだ。けれど、気がつけばもっと遠くに行っていて、そしておまけも付いてきた。
「は。笑うな、それ」同情の余地なし、人ごとだ、そんな感じのシニカルさで川島は笑った。「だいたいお前の車、ナビついてんじゃん。それでどうやったら迷うんだよ。俺なら無くても迷わねえぞ」
「残念でした。ナビは現在故障中です」一体全体、川島にとってなにが残念になるのかわからないけれど、馬鹿にされた腹いせとして内部事情を白状した。「それにほら、昨日の夜、すっごい雨降っただろ？　だから道がわからなくなったんだ」
「あ？　降ったか？　そんなすごい雨」川島は眉を寄せた。
「え？　……あー」ギイと椅子の背もたれを軋ませて天井の蛍光灯を見た。山を降りたとき、道はたしか……濡れてなかったか。「降ってなかったな、うん」
「お前大丈夫か？　やっぱり病院行ってくるか？　もちろん精神科」
「行ってたまるか。まだボケとらん」
「これからボケるみたいな言い方だな」
ははは と川島が笑った。課長がものすごい剣幕で僕たち二人を睨んでいた。
「やべえ。課長さん、自覚症状あったりするのかも」
まずいこと言ってしまったと川島は顔を青くした。が、それは断じて違うと言いきれる。
「仕事しろってことだよ！」

ああそうか！　そんな顔を僕に向けると、今度は課長に愛想笑いを浮かべながら自分のデスクに戻っていった。
どうしてこんなことをすぐにわからないのか。というより、やっぱりズレているな、とそんなことを川島に対して思う。それはとても苦労する個性だろう。
「さて、と」
これから仕事しますよう。今度はこちらを睨みつける課長にそうアピールしてから、僕はまたパソコンに向かった。

「たしかにクマ、できてるな」
先のことから一時間ほど経って、社内食堂のテーブルで向かい合った川島はそんなことを言った。
「ああ、そう」僕はコップに入った氷水をカランと飲んだ。かすれている喉にはちょうどいい冷たさだった。「昔、大学生くらいのときは別に一日くらい寝なくても平気だったんだけど……むしろ妙にテンション上がるくらいだったな」
カツカレーとサラダをトレイに載せて戻ってきた川島と違って、僕はただ氷水をテーブルに載せているだけだった。食欲がなかったのでただ川島についてきただけなのだ。
「夏とかだったら日の出に合わせて海行って、そんで全裸で砂浜走りまわる、とかするよな。みんなで」川島は言った。
嬉しそうに当時を回想する川島だったが、残念ながら僕はいくら高揚したところで、そんな真似はしないだろうから同調は難しい。きっと徹夜する目的もシチュエーションも、まるで違っただろう。
川島はがつがつと、それこそ体育会系丸出しでカツカレーを口に運ぶ。あまり上品とは言えないが、こんな風に食べてもらえるなら、作った人はさぞ本望だろう。
見ていると、くう、と腹が鳴った。触診するとたしかに空腹によって鳴ったものだった。そういえば今日はコーヒーという種類のものしか、喉を通っていなかった。元気が出た、というわけではない

が、食欲は引っ張り出された。そしてその音は川島にも聴かれたようだった。
「サラダやるぞ？」そう言って川島はトレイからサラダが盛りつけられた器を差しだす。
「ありがと」それを僕は素直に受け取った。テーブル備え付けの割りばしをパキッと割る。込んできた食堂内でただ水だけをテーブルに置いてその席を占拠していることに対して、若干後ろめたさがあったのでちょうどよかった。
「それにしても」川島が言った。「別に気にすることでもないけど、最近みんな疲れてんのか？　お前みたいな顔してるやつが結構いる気がするんだよな」
　僕は別に疲れているわけではない。今日一日は眠いだけ。しかしそれが連続するようならば、それは疲れていると言えなくもない。
「例えば？」僕はサラダのトマトを頬張りながら訊いた。大して興味があったわけではない。サラダを貰ったお礼のつもりの社交辞令だ。
「まあいろいろだけど、一番ヤバ目なのは侑子ちゃんじゃないか？　今日のお前並みの眠さというか疲労感というか、そんなのがもう毎日だ」
「侑子ちゃん？」誰だろう。あまり聞いたことのない名前だった。
「ほら、二課の……」
　二課、と言われたところでピンとくるはずもなかった。僕たちは一課にいて、同じ部門にいながらあまり交流はなかった。もっとも川島は違うけれど。
「かわいいんだけど、性格キツそうな……」川島は食い下がるが、僕がまったく知らないという可能性もあるのだった。
「同期？」それでも、訊いたからには最大限の努力は必要だった。
「いや、二つ年下」
「なら知らないよ。お前と違って交友関係は狭いから」それは社会人としてどうかと自分でも思うけれど。

「んー……知らない、かなあ……」
正直、どちらでもいい。顔を見れば、ああ、あの子か、となるかも知れない。が、なったところで、ああ、本当に疲れてそうだ、となるだけなのである。それがどうした、なのである。
僕が黙っていると、川島は言った。
「なんか……お前と違って素人目だけどよ、なんか憑かれてそう、なんだよなあ」
まあ、そんなこと言われたところで、僕にしてみればやはり、それがどうした、なのであるが。
人ごとな顔をしている僕を知ってか知らずか、川島は一人で心配そうな顔をするのである。僕はそんな表情を眺めて、イヤな予感がした。

呪うＯＬ　其の二

「侑子ちゃん、倒れたらしいぜ」
そう川島が言ってきたのはそれから二日後のことであった。僕はそのときにはすっかりその侑子という人のことを忘れていたので、全く誰のことなのかピンとこなかった。
そんな判然としない顔をしていると川島から、月曜に最近疲れてそうだってそういう話をしたじゃないか、と非難を込めた説明を受けた。ああそう言えばそんなこと言ってたな。いやそんな話なんかしたっけか。まあ川島がしたって言っているのだからしたのだろう。うん、したした。たぶんした。月曜のことなんてそんなに憶えてないけれど。だからってそんな睨むなよ、三枚目が台無しだぞ、川島くん。
で、それがどうした？
「いや、それがな」と言ったところで川島はグイと焼酎を一口飲んだ。「倒れたとき侑子ちゃん、寝言だかなんだかわからねえけど、まあようはうなされてたらしいんだな」
この話題が出たのは夜の七時ごろ。川島と来た居酒屋の席でのことだった。周防侑子という女性社員が今日の昼過ぎにいきなり気を失って倒れた、ということだった。
「それで、なんて言ってたと思う？」川島は訊いてきた。
「……もう食べられません？」
「ちげえよ！」だいぶアルコールが廻ってきたらしい。川島は声を荒げた。もっとも店内全体がそんな雰囲気だから周りに迷惑はかからない。「そんなこと言う子じゃねえよ」
ああ、そう。僕は玉子焼きを箸で切って口に運んだ。
「じゃあ、なんて言ったんだ？」
そう訊くと川島は周りを見渡して、顔をズイと寄せてきた。赤みがかった顔をした男に顔を寄せられて、あまり心持ち良くはないが

それでも釣られて僕も顔を寄せた。というか、耳を貸した。そんな秘匿性の高いものなのだろうか、と耳を貸しながら考えた。そして川島は口を開いた。

『許して、もう出てこないで、ごめんなさい』言って、川島は乗り出した身をもとに戻した。「だってよ」神妙な顔はもとに戻らなかった。

僕も体勢をもとに戻して、玉子焼の最後一かけらを口に運んだ。そして思った。たしかにそんな言葉は食べ過ぎが原因で出てこないだろうなと。もっとネガティブなイメージを受ける。

「それで俺は思ったわけよ。侑子ちゃんにはやっぱり何か良くないものが憑いてんじゃないか、てな」

「わかるもんか」なんとなく、川島のしたり顔が気に入らなかったので僕は食い下がることにした。「もう出てこないで、て言うのは胃の中から出てこないでって意味かもしれないだろ？　そこから食べ過ぎてごめんなさいって繋がるんだよ、きっと」

「……お前なんでそんな食べ過ぎに拘るの？」

さあ……。川島に言われて自分でもわけがわからなくなった。自分がそろそろアルコールのせいで気持ち悪くなってきたから、だろうか。

「とにかくさ」川島は少し声の調子を上げていった。話がずれそうだったからかもしれない。「洞下お前、一度相談に乗ってやれよ」

「いやだよ」なぜそんなことをしなければいけないのか、全くわからない。

「どうして」

「面倒だ」

「ふざけんな！」ドンと川島はテーブルをたたいた。「お前、霊が見えるんだったらそれくらいのことしてもいいじゃねえか」

だいぶ高揚しているらしい。川島は酒が入るとハイになる。逆に僕はロウになり、それに伴い若干機嫌が悪くなるので、酒席でのケンカは割かし多かった。そうなってくると、だいたいそれがお開き

の合図になるのである。
「僕だって、好きでこんなことになってるわけじゃないよ。生まれつきなんだ。面倒な上にそこに義務まで課される筋合いはないね」
「誰も義務なんて言ってねえよ。困ってる人がいて、それで力になれることがあったら助けるのが人情だろう」
「人情なんてそんなクサい言葉よく言えるな。ていうかその子、侑子ちゃんだっけか、その子はまず本当に困ってるのか？」
「困ってんだろうがよ。現に今日、倒れてる。それにここ最近は今にも倒れそうだった」
「それは事実だったにせよ、それが困ってることにはならないだろ？　それなのに、助けてやる、なんてそんな押しつけな有難迷惑誰がやるか」
「ああ？」なにが言いたいのかわからない、とそんな顔で川島は僕を睨んだ。川島の持論では、こういうのはごちゃごちゃと考えるものではないらしい。
それならば、と僕は川島との間、折衷案をとることにした。基本的に折れるのは僕の方だった。
「とにかく」ふう、と溜め息を吐いて気持ちを落ち着かせる。「僕は自分から行動するのはいやだよ。恥もかきたくないし」
「お前、まだ言うか」
「どうしてもって言うなら、川島が連れてこいよ。その侑子ちゃんって子」
言った後で後悔した。でもまあ、明日にはきっと忘れていることだろう。川島もだいぶでき上っているようだし、そして川島はアルコールが入ると物忘れがひどくなるのだから。
だから、明日にはきれいさっぱり忘れている。

はずだった。
川島は翌日になってもそのことはよく覚えていて、そして本当に侑子ちゃん、もとい周防侑子を夕食に連れてきたのだった。昨日の

喧騒とした居酒屋ではなく、少しお洒落なファミリーレストランである。
先に行っていろ、と川島に言われてここにきてコーヒーを飲んでいると、川島が周防侑子を連れて現れたのを見たとき、正直にいって開いた口が塞がらなかった。それは比喩ではない。
川島と周防侑子が隣で座り、そして僕が二人と対峙するような座席になった。
「えと……周防侑子、です」彼女は戸惑いを隠しきれないといった様子で自己紹介をした。その雰囲気は弱気ではなく、かといって苛立ってもいない。冷静になぜ自分がここに呼ばれたのかを分析しているようであった。
「洞下、基紀です」
自己紹介をされたのだから、当然僕もそれに応える。しかしそれは、知っています、とそう返された。少し意外だった。
「新人研修のとき、お世話になりましたから」侑子ちゃんは言った。
新人は入社したとき、まず自分がどのような会社に入ったのかを完全に把握あるいは確認するため、研修を受ける。僕はその折、社内見学を受け持ったことがある。侑子ちゃんはそのときのことを言っているのだろう。よくもまあ二年前の一日のことなんかを覚えているな、と僕はそう思った。
「それで、あの、私どうして連れてこられたんでしょう？」侑子ちゃんは僕を見た。
僕を見たところで何も始まらない。仕方がないので僕は川島を見た。僕に見られた川島は、本当にこいつはどうしようもないやつだ、という顔を僕に向け、それからすぐにこれ以上ないというくらいの優しい笑みを作って侑子ちゃんを正面に捉えるように見た。つまり身体をテーブルに少し乗り出して、そこから振り返るように侑子ちゃんを捉えたのである。
「侑子ちゃんさあ、最近悩み、あるでしょ」川島の声は訊く風ではなく、それはむしろ断定であった。

詐欺師かキャッチセールスの手口だ。僕はそう思った。川島が期待していた答えはもちろん、ある、であったが侑子ちゃんの口から出てきたのは、いいえだった。
「取り立てて悩みはないです」
「嘘だね」川島は言った。「侑子ちゃん、君は絶対何かで悩んでいる」
僕は川島の自信満々に決めつけるその根拠を知りたいと思った。それほど呆れた。
川島がそうしつこく訊いても、侑子ちゃんの答えは、悩みはない、本当にない、であった。もし本当は悩んでいるのだとしても、この男にだけは打ち明けたくはないだろう、と内心思ったがもちろんそれは黙っていた。というか、むしろ僕は挨拶以外何一つ会話に参加していなかった。
「というか、すいません」侑子ちゃんは言った。「その侑子ちゃんて言うのをやめてくださいませんか。あまり良い気はしないので」
川島は若干口ごもって、一言、ごめんと謝った。たしかに侑子ちゃんは、心の中ではともかく、口にして彼女を呼ぶとき、さんを付けた方が自然だと思える雰囲気である。それにしても川島と侑子ちゃんは、どうやらそれほど仲は良くないらしい。どころか嫌われている感さえする。
侑子ちゃんは川島がひるんだ隙に、これまでと逆の立場となって、うかんだ疑問をぶつけるのであった。
「すいませんが」とまたしてもその言葉を前においてから話し始める。「もしかして、誰かから相談に乗ってくれ、と頼まれたりしたんですか？　私が昨日仕事中に気を失ったりしたばっかりに」
川島は何か判然としない態度でその場を濁そうとしたが、それでも侑子ちゃんはそれを許さなかった。
「うちの課長ですか？」
と訊くのであった。二課の課長は心配性で有名であった。
川島はここでなぜか助け船を得たような顔つきになったので、川

島が言う前に僕が言ってやった。課長をだしに使うのも、嘘を言うのもあまり気持ちのいいものではなかった。だから、
「違うよ」と言った。「基本的に全てこいつの独断」
川島から呪いの声が聞こえてきそうだったがそれを黙殺する。
僕の言葉を聞いた侑子ちゃんはただ一言、そうですか、と言った。そこには溜め息も交じっていた。
二、三秒ほどの静寂の後、侑子ちゃんは立ち上がる。
「大変申し訳ありませんが、失礼させていただきます。私もあまり暇ではないので」
従うべき者を見定め、そして決して柔くない。ノーと言える日本人。彼女は将来有望だ。僕は彼女に感心する。
しかしその退出を善しとしないものが一人。当然ながら川島だった。
「君は本当にそのままでいいのか？」後悔するぞ？　そんなニュアンスで川島が侑子ちゃんをひきとめる。
侑子ちゃんは首を傾げる。何を言っているのだろう？　と。
「単刀直入に訊こう」川島は厳かとも言うべき雰囲気で彼女に質問をする。たしかに、ここに連れてきた目的は最初からそれ一つだけなのだから、僕としてもその質問には賛成だった。「君は、今、幽霊に取り憑かれている。そうだろ？」
しばしの沈黙。整理するための沈黙。再確認のための沈黙。そして。
「はあ？」この男は一体何を言っているのだろう、とそんな感じで侑子ちゃんは眉を寄せて川島を見た。「あの、私、幽霊なんてついていません。第一、そんな非科学的な存在、いるわけないじゃないですか。本当に何を言っているんですか？　川島さん」
「まあ、そうだろうね」僕はつい口を開いてしまった。「だって、なんにも見えないもん」
「え？」
聞こえた声は二つだった。

「え、あの、洞下先輩って……あの、見えるんですか？」侑子ちゃんが訊いてきた。どうしてそんな震えているのだろうか。
「だから見えないって。君には何一つ、幽霊なんて憑いてない。君もそう言ったでしょ？　どころか幽霊なんていない……て」どうしてこんなにも取り乱すのか、僕はそのとき、全く見当がつかなかった。「ね、え……？」
僕は所在なさげに、二人は固まったままだった。

呪うＯＬ　其の三

全く以ておかしなことになってしまった。切実にそう思う。僕は今車を運転していて、助手席には知り合ってから一時間たっていない、そんな間柄の女性が一人。

そんな女性が口を開く。「次の角を右折です」

行きつく先は彼女のマンション。僕はそこで彼女と一晩をともにする。とまあ、そういうことになったらしい。

全く以ておかしなことになってしまった。そう思いながら、僕は右にハンドルを切った。

「そんなはずは……」彼女は言った。ファミリーレストランでのことである。

その言葉は一体誰に向けて言ったのか。おそらくは本人にさえ向いていない。そんな風に、ただ宙をさまよった挙句に消えていった。そうして彼女は腰を下ろした。脱力した結果、腰を下ろした。そんな風だった。

「どうしたの？」沈黙に耐えきれず、僕は口を開いた。それほど彼女は見ていて痛々しいものだった。

「えっと、洞下さん」彼女は僕の目を見て言った。「幽霊が見えるっていうの、本当ですか？」

「見えるか見えないかでいったら、まあ、見える方だと思うよ」なんとなく期待されているのがわかったので、僕はわざとはぐらかした。が、それに意味はなかったらしい。

「で、見えないっていうのは……」本当なのか？　彼女はこう言いたいらしかった。

「本当だよ。君には何一つ――」

「そんなはずはないんです」彼女は僕の言葉を遮って言った。「そんなはずは……」

さっきからこればかりだ。僕は思った。
「どういうこと？」そして僕は訊いた。
そうして彼女はとつとつと語った。それを要約するとこうなる。
とにかく彼女には幽霊が憑いていて、それが夜になると姿を現し、枕元に立ってずっと彼女を朝方まで睨むというものであった。
それを聞いて、今まで黙っていた川島は僕に向けて、嘘つき、というような目線を送った。それはもちろん、僕に対してである。そしてもちろん、僕は嘘を言っていない。
嘘ではない、と彼女は言った。
嘘ではない、と僕も言った。別に張り合うつもりはなかったけれど、それでも嘘を言うつもりもなかった。
そんなことだから折り合いが全くつかず、また折り合いなどつけるわけにもいかず、どうしたらいいのかわからなくなった。彼女は半ば錯乱し、何も耳に入ってこないようだった。
そんなとき、川島が口を開いた。いつもはこんな役回りにはならないけれど、いつの間にか部外者になってしまったものだから、客観的に物事を捉えられた、ということだろうか。
「今は憑いてない。けど夜になったら憑く。そういうことじゃないか？」
と。
在りえるのだろうか？　僕は思った。そういった可能性としては場所ではないか。地縛霊というものがいる。そいつらは土地に縛られているから、いつもそこにいる。で、時間指定……時縛霊？　いや、これは言葉遊びだ。そんな、いつも言葉通りに世界が廻るわけがない。
僕はこんな風に思ったが、それはやはり僕個人の感想、意見であって、川島の言葉に対して感じ方は人それぞれである。彼女は僕のように感じなかった。そういうことだった。
つまりは、そういうことだった。

しゃわわわ、と水がタイルに落ち続ける音がする。それに僕は耳を清ます。部屋に滝があるわけではないので、その音とはもちろんシャワーを浴びる音である。

さて問題です。誰がシャワーを浴びているでしょう。ちなみに僕は浴びました。僕は今リビングのソファに座っています。

……言って、少し嫌悪する。誰に対して、ではない。この状況に対してだ。あらかじめ自分の家に寄って、泊まる準備はしてきたので、衛生的にも精神的にも不潔ではない。問題はそこではない。

川島を残してその場を去った時、その川島の顔を思い出す。唖然としていた。僕もきっと同じような顔をしていただろう。

そうこうしているうちに侑子ちゃんがシャワーから上がった。髪はしっとりと濡れていて、とてもいい香りがする。

「男はオオカミ、て言葉知らない？」僕は出てきたばかりの侑子ちゃんにそう話しかけた。

それに侑子ちゃんは、きょとんとした。

「肉食……？」侑子ちゃんは顎に手をやって考える。「それとも家族を大切にするって意味ですか？」

僕はそれに溜め息をついた。

侑子ちゃんはおそらく頭がいい。回転も速い。すぐに「わからない」などを言わないあたり、きっとそうだ。それでもどうして、辿り着くべき答えに達しない。世間ではこういう人を変わっている、というのだろう。

「なんでもないよ」僕は言った。

そういったことを考える自分が下種なのだ。そう思うことにする。危ないなあ、なんてことも思うわけだが。

おかしなことを言う、とそんな目で侑子ちゃんが見てきたので、話題を変えようと思った。

「それにしても」今さらだが、「いいところ住んでるね」

少なくとも、ワンルームではないことに僕は少しばかり安心したのを思い出した。

そのことに侑子ちゃんはバスタオルで髪を乾かしながら答える。
「そんなことないですよ。ていうより、嫌味ですよそれ」
どうして、と僕は訊いた。
「だって先輩の住んでるところって、まさしく家じゃないですか。実家じゃないって言うし、しかも二階建て。そこに独り暮らしですよね？　そんな人にここを立派だって言われても、それは嫌味にしかなりませんよ」
言われてみればそうかもしれない。まあ、そうだろう。
「いやでも、自分家にはここほどの温かみはないよ」僕は部屋の周りを見渡した。初めて部屋に入った時から気になっていた、壁掛けのコルクボードに目がいった。
「アレとか、いいよね」
コルクボードには写真が所狭しと張られてあった。
「作ればいいじゃないですか」後ろにあったので、侑子ちゃんは振り向いてそう言った。
話題がそれてきた気がするが、別にいいと思った。
「作って、ていうか買ってきても、僕にはそこに張る写真がないしなあ」
「写真、撮らないんですか？」
「まあ、撮らないな。ていうか撮ったこと、ないかも」その表現は多少の誇張が入った気がするが、自発的に何かを撮ったという記憶はない。
「へえ、そうなんですか」侑子ちゃんは意外そうだった。
さっき侑子ちゃんを変わっている、なんて思ったけど僕も少しは変わっているのかもしれない。
「まあ、修学旅行とかでも一枚も撮ったことないし」
と、僕は今まで修学旅行以外に旅行なんてしたことあったか、と回想する。答えを出すのは止めておこう。
少し沈黙が流れた。
せっかく写真のことが出たので、まだそれを引っ張ろうと思った。

「けっこういろんなところ、行ってるね」
張られてある写真は何枚もあって、それはどれも背景が違っていた。ようく見てみると、背景に映った文字が日本語ではないものが何種類かあった。
「ええ、まあ」少しだけ、侑子ちゃんは微笑んだ気がした。「私、けっこう旅行好きなんです。そのときの思い出にって写真を撮るんです」
一緒に映っているのは友人だろう。二人して仲良く映っている写真が多い。僕や川島には絶対に見せないような笑顔で、侑子ちゃんは写真に写っていた。そして友人はそれと対照的な笑みで映っていた。
それを見ながら、僕はあくびを一つした。コルクボードの上にある掛け時計を見ると、十一時を廻ったところだった。眠るにほんの少し早い。けれどすることもない。だったらもう寝てしまおう。そう思った。
そう思って侑子ちゃんにそれを言う。
「ちょっと早いけど、もう眠いから寝させてもらおうかと思うけど」
それに対し侑子ちゃんは、「え?」と漏らした。お前何しにきたの? そんなことを続けられそうだった。
「大丈夫。僕、けっこう敏感な方だから」眠気を意識すると一気に睡魔がやってきた。瞼がもう重かった。「幽霊とか出たら、たぶんすぐ目が覚めるよ」
「はあ、そうですか」釈然としないながらも侑子ちゃんはそう言った。「でしたら私ももう寝ます。寝室はこっちですから、どうぞ」
「いや……」さすがにそこまでは、と予想しながらも想定していなかった。「僕はここで寝るよ。ソファ借りて」
「いやでも、私と一緒にいてもらわないと」
これは譲らないと、そう言っていた。
「だからさ、男はオオカミ……」
「でしたら、尚更メスと一緒のところで寝ないといけませんね」

言っていることは正しいのだろうが、それは全くの間違いだ。だって僕人間だもん。オオカミじゃないもん。と、そんなことを考える僕が下種なのだ。そう思いながら、僕は渋々ながら従った。全く危ないなあ、とそう思いながら、寝室に入る。

「それじゃあ布団敷きますね」と、侑子ちゃんはどこからか敷布団を持ってきて、ベットのすぐ横に敷いた。

きっと二人で眠るには狭いから、なんて理由で、僕が予想する理由ではないのだろう。

まあ、いいか。そう思い僕は礼を言って、布団に入った。

「それじゃあ、おやすみ」僕は言った。

「はい、それでは」侑子ちゃんもそう言って、布団に入った。

侑子ちゃんが敷いた布団はとてもふかふかで、すぐに眠り入ってしまった。

なにしろそれからの記憶がない。

朝、僕が目を覚ますと、清々しい朝日が僕を包み、そして半泣きで僕を睨む、侑子ちゃんが出迎えてくれた。

呪うＯＬ　其の四

「寝てんじゃねえよ」
川島は言った。呆れるようにして言った。
食堂が騒がしかった。
「どうして寝たんだ？」川島は呆れた顔のまま訊いてきた。
「眠かったから」それ以外に一体何があるのだろう。
それなのに川島は、あほ、どあほ、と僕を罵倒するのであった。

朝に出社するとき、とにかく気まずい雰囲気が僕と侑子ちゃんをまとった。侑子ちゃんは平常自転車で通勤しており、その自転車を会社に置き去りにしていたので、必然的に僕が車で送ることになったのだが、その車内が一番気まずかった。侑子ちゃんは一言も喋らないし、僕としてもなんとなくではあるが悪いことしたんだろうという罪悪感で話せるはずもなかった。
そういったシチュエーションで、会社までの所要時間の約十五分、その時間がとにかく気まずかった。会社に着くまでに一日の気力を全て使ったような、そんな疲労感が車を降りるときに襲った。
そして僕と侑子ちゃんが別々になるとき、侑子ちゃんはここで初めて口を開いたのだった。
「先輩のことはあてにできません」
と、僕の目も見ず、下を向いたままでそう言った。
僕はその言葉に関して何か言おうとしたけれど、何一つ考えがつかなかった。期待に添えなかったのだから、それは仕方のないことだと思った。
そしてそのことはこのこととして置いておきたいところだったのだけれど、そうさせてくれない男がいた。もちろん川島のことである。
出社して元気がない僕に向かって、悪いことしたんだろう、と言

ってきた。
　してないよ、と僕は言うと、嘘だと言った。それに加えて川島は、侑子ちゃんの様子がますます悪化している、とそう指摘した。ストーカーじゃないのかと僕は思ったが、それは伏せておいた。
「本当に何もしてないよ」
「嘘だ、絶対嘘だ」
「じゃあ何をしていてほしいんだ？」
「してほしいことなんてないけどよ、とりあえず襲ったんだろ？　そうなんだろ？」
「お前は僕以上の下種野郎だな」笑って言った。「ただ寝ただけだ」
「一緒にか？」
「変に捉えるなよ。本当に寝ただけだ」同じ部屋で、寝たけれど。
「ああ？」
「まあ続きは昼休みにでも、さ」
　課長がやっぱり睨んでいた。
　そうして昼休み、昨夜あったことを洗いざらい川島に話した。プライバシーなんてあったものじゃないけれど、それはそれで、これとしてはしょうがないことである。そうでなければ川島が浮かばれない。

「そんな馬鹿にすんなよ」僕は言った。そこまで馬鹿にされる理由がわからなかった。
「いや馬鹿だろ」川島はあくまで僕を馬鹿にしたいらしかった。「だって、そうじゃなかったら、お前は一体何しに泊まりに行ったんだ？　て話になるぞ」
　僕はその言葉に固まった。
「どうしたんだ？」動かない僕に川島は首を傾げた。
　そして、僕も首を傾げる。
「ほんとさ、なんで僕、泊まりに行ったんだろ？」
「ああ？」川島は首を傾げた上にそこから最大に眉を寄せて僕を睨

んだ。「侑子ちゃんが困ってるから、力になりに行ったんだろ？」
「いや、それは川島が勝手に言ってることじゃないか」ここまで来てなんだけど、そんな言葉は侑子ちゃんからは一言も聞こえてきていない。「それに僕、侑子ちゃんから一度も助けて、なんて言われてないんだよ」
ここまで言って、川島は急に怒り出した。
「洞下、お前は人を助けるのにいちいちお願いされるのを待っているのか？」かなり、腹に響いてくる声だった。
「普通、そうだろ？」そうではないのか。
「違うな」川島は言った。「人を助けるのはそうじゃない」
そうじゃない、そうじゃない。それに繋がる言葉は出てきそうもなかった。が、こういうものは理屈で考えるものではない、ということだったか。
「そういうものか？」僕は訊いた。
「そういうものだ」川島は答えた。
そういうもの。そうらしい。しかし、侑子ちゃんに関しては、その思考自体がずれている、とそう感じる。
「でもさ」僕はさらに訊く。「それじゃあ僕は一体、どうすればいいんだ？」
「どうするって、侑子ちゃんに憑いてるその幽霊を――」
「その幽霊がいないって言ってんの」
「ああ？」また川島は先ほどと同じような態度をとった。「だってお前、寝てたんだろ？」
「寝ててもそばに幽霊がくればわかるよ。そういうレーダーは全開にして寝たんだ」
「お前、そんなことできるのか？」
「まあイメージの話だけどね」自分で言っておいて、そう突っ込まれると自信が揺らぐ。「ほら、何時に起きようとか、そうやって意識して寝ると、その時間になったら勝手に目が覚めるでしょ？　それと同じ」

「お前そんなことできるのか？　器用だなあ」川島は目を丸くした。
「今度俺も試してみよう」
話題がずれそうだったので僕はとにかくと言って、修正をする。
「とにかくさ、そうやって寝て、起きなかったんだから侑子ちゃんに霊は憑いてないよ」
本当か、と川島が訊いてきたので僕は、信用していい、と答えた。
それでも川島は、
「でもよ」と、まるでテレビに出てくる探偵のように言うのである。
「お前に見えないような幽霊だっているかも、なんだろ？」
前にそのようなことを川島に言ったことを思い出した。だいぶ昔のことである。まだそんなことを憶えてたのか、と僕は意外に思い、そして感心した。
「まあね。見えるものはわかるけど、見えないものはわからないし。それに……」続く言葉を言う前に、一拍だけ呼吸を置いた。「見えないものって意外に多いよ」
「例えば？」川島が訊いた。イメージがつかないようだった。
「例えば、人の心とか」爽やかに、笑いながら言ってみた。
「気障ってえ」川島も笑った。「なんだよそれ」
まあ、これはワンクッション。ここから少しだけシリアス。
「あとそれと」僕はテーブルの上を見ながら言った。「呪い、とかもそうなんだよね」
「呪い、だあ？」川島は、こいつは何を言っているのだろう、という目で僕を見た。「呪いって丑の刻参りみたいなもんか？」
「まあイメージとしてはそんなもんかな」
「あり得るのか？」訝しむ川島だった。
「あり得るさ」そう、当然あり得る。「なんたって幽霊もいるんだぜ？」
僕のその言葉にあまり釈然としない川島だった。
「まあ、お前が言うんだから、そうなんだろうな」それでも、無理やり川島は納得した。よくも悪くも川島はあまり物事を考えない。

その代わり、許容する能力は人一倍高いのだった。まるで子供のようだ、とそう僕は思っている。
「でもよ」と川島はまた言った。「別の意味であり得るか？　なんたって侑子ちゃんだぞ？」
なんたって侑子ちゃんだぞ？　反芻したが、その真意を汲み取ることができなかった。そんな顔をしていると、川島は一言補足してくれた。
「人に恨まれるような性格してるかって言ってるんだ」
ああそういうことか、とここで僕は納得した。
「だってよ」川島は続けた。「後輩の面倒見はいいし、上司に対して言葉づかいもいいし、気がきくし、それでいて自分の意見も言えるし、かといって我を通すようなことはしないし。後輩からなんて言われてるか知ってるか？　侑子姉さんだぞ？　それに――」
「よく知ってるな」二課なのに。僕たちは一課で、大した繋がりはないはずなのに。
「まあ、な」歯止めが効かなくなっていたらしい川島は、僕の一言で止まってくれた。「とにかく、あんないい子が呪われる、以前に恨まれるわけがない」
一理ある、とも思うし、それ以上だとも思う。
けれど。
僕は写真に映った、対称的な笑みをした彼女を思い出す。
「だからこそ、呪われることってあるんだよな」
川島は、僕が何を言っているのか、何を言いたいのかわからないようだった。。
そして僕はそれ以上は言うつもりはなかった。ただ、言葉遊びだな、とそれだけ思った。

呪うＯＬ　其の五（終）

侑子ちゃんがまた倒れたという報せを聞いたのはその日の午後三時ごろのことである。どこから漏れたのか、自動車通勤で侑子ちゃんのマンションを知っているのは僕だけだというので、二課の課長直々に侑子ちゃんをそのマンションまで送り届けるようお達しがきた。病院へ行った方がいいのではないかと思ったが、そのまま今日は上がっていいと言われたので黙ってそれに従った。

侑子ちゃんのマンションに着くまで、朝にかけた以上に時間がかかってしまった。それでもその車内は朝ほどの気まずさはなかった。会話もあった。ごめんなさいと、気にしなくていいよというやりとりだった。

マンションに着き、帰ろうとするのを侑子ちゃんに引き留められた。内容は送った礼に茶を出すというものだった。それを僕は断ったが、侑子ちゃんはそうはいかないと譲らなかった。なので僕はそれに従った。

一応予想はしていたし、腹積もりもしてきていた。

我慢できなかった、というのも正しい理由のひとつだ。

リビングのソファに座っていると、侑子ちゃんが本当にお茶を持ってやってきた。律儀だとは思うけれど、そこに本当の危うさを改めて実感した。ある程度近づいたところで、唐突を意識して僕は口を開いた。

「昨日も見たの？」幽霊を。

それを聞いた侑子ちゃんは厭な顔をして歩を止めた。

「ええ。けど、あなたには関係ありません」そう言って、侑子ちゃんは再び動き始める。

「関係なくはないさ」ふふん、と僕はシニカルに鼻で笑った。「こうして家まで送ることになった」

「ですから、こうしてお礼にお茶を」言いながら、侑子ちゃんはテーブルの上にお茶の入ったコップを置いた。
「ありがた迷惑って言葉知ってる？」僕は言った。
それを聞いて、侑子ちゃんは僕を睨みつけた。そこから何か言おうとしたけれど、僕はそれを許さなかった。
「君ってさ、結構、周りからズレた世界をしているね」
釈然としない顔をしながら、侑子ちゃんは向かいのソファに腰を下ろした。何を言っているかわからないので、所在がなく、仕方なしに腰を下ろしたという感じがした。
「何を言っているかわからない？」言ってやった。「君はどうしようもない勘違いをしたまま生きている、頭の弱い馬鹿女だって言ってるの」
これを聞いて、侑子ちゃんは鼻で息を吸い込んで目を一瞬見開いた。僕の言っていることの意味を理解したわけではなく、ただ、単語にだけ反応した。侮辱された、と思っただろう。
それを僕は冷静に観察する。侑子ちゃんは頭がいい。だから、分析されては困るのだ。左脳の出番は、今日はない。
普段の生活で、僕はこんなことを断じて言わない。というかしない。だから反動の興奮作用が半端ではない。それを努めて抑える。こちらにとって、右脳の出番は、今日はない。やっぱりやるんじゃなかったな、と思ったけれど、それはもう後の祭りというのだろうか。祭りの部分はこれからなのに。
また侑子ちゃんは何か言おうとしたけれど、やっぱり僕はそれを許さなかった。
「普通さ、会ったばかりの男の人を自分の寝室には泊めないよ？」どういうつもり？　「襲われたらどうするの？」
ほんの少し、間が空いた。
「目的が」侑子ちゃんは言って、顔を軽く振った。感情をリセットしたようだ。「目的がありました」
ここでどんな目的かを訊いたなら、それはもう意味がなくなる。

全てにおいて意味がなくなる。
「目的ね」また僕はシニカルに笑った。余裕を見せるという試みだ。
「でもさ、その目的が僕と君で違っていたら、どうなってた？」
侑子ちゃんは黙った。黙って、思考した。そしてやはり、その答えはズレていた。
「私がお願いして、そしてあなたを連れてきたんです。ですから目的を違えることはありま――」
「あり得るね」人というのは自らの意見を遮られると余裕をなくす。
「実際僕は昨夜、君を襲うためにここに来たし」そして自分の身に危険が迫っていると自覚した場合も、余裕をなくす。
侑子ちゃんの喉が、か、と震えた。
帰ってたまるか。僕は思った。
「それでさ」僕は強い口調でそう言った。侑子ちゃんをその一言で抑えつける。そして続けた。「君は色々と勘違いしているんだよ」
「勘違い？」侑子ちゃんは戸惑いながらそう問い返した。
「そう。君には幽霊なんて憑いてない。それは君の勘違い」
「そんなはずは――」
「でもその代わり、そう、幽霊に憑かれているというよりは、君は呪われている。そう言った方が正しい」
「呪い？」
「そう、呪い。心当たり、あるんじゃないの？」
僕がそう言うと、侑子ちゃんは目線を泳がせ、ただの音を喉から漏らすだけだった。返事は返ってこなかった。
「誰に呪われているか、当ててあげようか」
ビクリと侑子ちゃんは肩を震わせて僕を見た。それでも返事は返ってこない。
「あの子、だよね」
僕は侑子ちゃんの背後にある、コルクボードに貼られた写真を指差した。正確に言うと、その写真に写った『対称的な笑みをした彼女』を、指差した。

「そんなはずは――」侑子ちゃんは僕が誰を差したか一瞬で察して、否定した。これまでで一番強い否定だった。
「――――ないよね」僕は言った。「だって、あの子もう死んでるもんね」
「どうして……？」そのことを知っているのか。もう、長い言葉をしゃべることができないほど、侑子ちゃんは余裕をなくしていた。
「霊感が有るか無いか、じゃなくて、強いか弱いかの基準で言うと、僕ってかなり強い部類に入ると思うんだ。写真を見て、その人が生きてるか死んでるかくらいはわかるよ」
『彼女』は、横に写った侑子ちゃんとは『対称的に』、生気が伝わってこなかった。
「で、死んだの、って」死んだという事実を強調して、僕は続けた。
「けっこう、最近だよね。写真の君は今と大して変ってないし。それで、どうしたの？　どうして、死んだ？」
「あ、あなたには――」
「もしかして殺した？」
「違います！」侑子ちゃんは泣きそうになっていた。泣いていないのが不思議なくらい、泣きそうになっていた。「ただ……」
「ただ？」僕は先を促した。
「遅れたんです」息も絶え絶えといった感じだった。
「何に？」
「待ち……合わせに」
「何の？」
ここで侑子ちゃんは、息をすうと大きく吸い込んだ。ふうと息を吐くころには肩の震えはある程度治まっていた。気持ちのリセットをしたらしい。本当に頭がいい、と僕は思った。そしてその深呼吸は、話す決心を固めるためのものでもあったようだ。
「加奈子……彼女の名前ですけど、加奈子と私は、大学のころからの友人でした。二人して色々なところへ行きました。旅行好きになったのはそのころです。大学を卒業すると、加奈子は九州の方へ仕

事が決まったので、遠くになりました。学生のころに比べたら遊ぶ機会も減りましたが、週末や、それで足りなかったら有給をとったりして、そして遊ぶようなことをしていました。だいたいはどこかの温泉に行ったり、観光地を巡ったりしてたんですけど、その日は、私の部屋に遊びに来る予定だったんです。私が、最近遊び過ぎてお金がない、って言ったら、加奈子が、じゃあそっちに遊びに行く、って言ってくれたんです。仕事が終わって、そこから新幹線に乗って、だいたい十時ごろこっちに着く予定でした。でも、その時間に私は遅れたんです」

「どうして？」少し間が空いたので、僕は先を促した。

「仕事が、終わらなかったんです。その日の帰り、課長から、週明けの会議資料の作成をお願いされたんです。大した量でもないし、土日で仕上げられるだろう、って。断ろうと思いましたが、話を聞く限りでは、無理……ではなかったんです。これから家に帰ってとりかかれば、加奈子が来る前には間に合うだろうと思いました。それで実際とりかかってみると、時間がかかってしまって、気付いたときには十時を過ぎていました」

侑子ちゃんは車を持っていない。だから自転車で行ったのだろうか。いや、迎えに行ったのだから、バスだろうか。それだとダイヤが悪ければ一時間はかかる。かなりの遅刻だ。

「着信があったんで、これから急いで迎えに行くから、バス停で待ってて、って言って、そのバス停までの道順を教えました。そして家を出ました。でも、そのバス停に加奈子はいませんでした」

バス停で待ち合わせた場合、大抵は時間を待たずにすぐ会える。それが普通だ。

「迷ってるのかと思って駅まで探しに行ってまた戻ってという風に、十分くらい捜したんですけど、どこにもいなくて、それで私、加奈子の携帯に電話しました」

侑子ちゃんの唇が震えだした。その震えは顎へ、そして肩へ、そこから全身に伝搬していった。瞳は震える代わりに涙を流した。

「それで、それで私、電話したんです。加奈子の携帯に」侑子ちゃんは同じ言葉を繰り返した。次の事実を拒むようだった。
それでも、もう止まらない。震えも、涙も、そして言葉も。
「出たのは男の人でした。警察だって言われました。あなたは誰？
って訊かれました。加奈子の友人ですって答えて、加奈子がどうかしたのかを訊き返しました。そしたら」
そしたら？
「たった今死んだ、って返ってきたんです！」泣き叫ぶ、慟哭とはこのことを言うのだろうか。「交通事故だって。トラックが突っ込んだんだんだって」その慟哭は一瞬で、次第に侑子ちゃんは消沈していった。
そしてもう一度波が来る。
「私、私！　そう言われたとき、眼の前にいたんです！」
事故現場が、眼の前にあったのだろう。
「バリケードが張ってあって、片付けしていて、そこの壁とかものすごくて！　……血もいっぱい付いていて！」
そこに突っ込んだのはトラックだった。想像する分には、凄惨の一言で十分だ。
「でもそれは、私の所為なんです。私が遅れたから。加奈子、最後の電話で怒ってました。信じられないって。そして死んでいったんです。私、会ってから謝ろうとして、結局謝れませんでした。そして……」侑子ちゃんは黙った。思考を開始した。「加奈子を殺したのは私です」口を開いたとき、侑子ちゃんは本当に泣いた。今までとは違う、贖罪の涙だった。「私が遅れなければ、バス停まで誘導しなければ、加奈子は死なずにすんだんです。いえ、私がお金がないなんて言わなければ……。いえ、私が」
生まれてこなければ。そこまでは言わせてはならない。呪いが訊き過ぎている。僕は口を開く。
「そう、かもね」なんだってよかった。その言葉さえ言わせなければ。たとえそれが肯定の意味合いを持っていても。

僕の言葉に侑子ちゃんは、はいとだけ頷いた。否定を求めてはいないようだった。
「だから、私は加奈子に恨まれて当然、そう、呪われて当然なんです」
「まあ、当然ではあるね」侑子ちゃんの言葉に僕は素直に同意する。
確かに、呪われても仕方がない。そういう状況だ。
「でもね」僕は真顔で続ける。「君は恨まれていない」
「どうしてわかるんです！」侑子ちゃんは激昂した。目線が痛かった。
「わかるさ」それを僕は表情を変えずに受け止める。さも当然のように。「だって、君には加奈子って子の、どころか幽霊なんて憑いてないし」
「そんなはずは……」
そう、そんなはずは。
僕が言うとおかしいことなのだけれど、幽霊がいてもいなくても、それを見るのは人間なのだ。同じように、呪われていようがいまいが、呪われていると思うのも人間だ。人間とは思いこむ生き物なのだ。
侑子ちゃんは自身を呪って、そして自身に呪われた。
「本当だよ。何度でも言うけど、君には幽霊なんて憑いてない。幻ではなく、本当の幽霊が見える「僕が言うんだから間違いないよ。残念だったね」
「残念？」侑子ちゃんは僕の言葉にかみついた。「どういう意味です？」
「だってそうだろ？　君はさ、憑いていてほしかったんだよ、加奈子さんに。そうじゃなかったら初めて僕が憑いてないって言ったときに、あんなにうろたえたりしないよ」
願望もあったのだ。だからこそ、より一層強く呪われた。
「どうして？」自分がそんなことを望むのか、それを訊いてきた。
「だってさ」それに僕は答える。「寂しいじゃん。ずっと友達だと

思ってて、それでその人が自分の所為で死んでしまった。そりゃ、自分を呪うっていうくらいしてくれなきゃ、割に合わないって思うよね」

一瞬、侑子ちゃんは呆けた。

「そう、ですね」そして頷いて、「でも、呪っては、くれなかったんですね、加奈子は」寂しい目をした。

「そ。寂しいね」あいつにとっての自分は、一体どんな存在だったのだろうという、果てしない虚無感。「でもまあ、気にすることないよ。人間ってやつは基本薄情なんだ」

「そうなんですか？」

「そうだよ？　問題は、生きている人間がどうするかってことだと思う」

「それ、霊感が強い人から見た人生観ですか？」口許だけ、侑子ちゃんは笑った。

「たぶんね」言いながら、僕は目を反らした。「なにか、やり残したこととか、言い残したことはないの？」

それに侑子ちゃんは下を向いて考えた。

「そうですね」出した答えは「謝りたいです。加奈子に」だった。

「謝ればいいと思うよ」僕は言った。

「届きますか？」侑子ちゃんは訊いた。

「もちろん届くさ」

「……そうですか」

侑子ちゃんは目を閉じて、二、三回大きく深呼吸をした。

そして、言った。

「遅れて、本当にごめんなさい」

流れた涙は贖罪のものではなく、友との死別を悲しむ涙、それだけであった。

幕間

「丑の刻参りってさ、七日間で成立するわけだけど、その期間中って呪ってるところを絶対に、人に見られちゃ駄目なんだ」僕は言った。

「絶対に？」川島が訊いた。

「そう絶対。じゃないと呪いは自分に跳ね返っちゃうってことになってる。まあ昔は、見た人も呪っている相手と一緒に呪い殺されるってされてたらしいけど、現代では跳ね返っちゃうんだよ」

「よくわかんねえな。どっちが正しいんだよ」

「どっちだって正しいよ。大事なのはそこじゃない。大事なのはさ、まあ現代では、『見られちゃいけない』ってこと。昔は『見ちゃいけない』の方だったんだけど、どっちの決まりでも、結果は同じだろ？」

「結果？」

「呪う行為は誰にも見られないという前提条件。『見られちゃいけない』から、術者はそのことを絶対に隠す。『見ちゃいけない』から、周りは逆に目をふさぐ」

それを聞いて川島は納得したような顔をした。そういうことか、と。

「でもそれっておかしくない？　って思わないか？」僕は逆に訊いた。

「んん？」すっきりした川島に、またもや雲がかかった。

「だってさ、見られちゃいけないのに、呪ったっていう形跡はばっちり残して帰るんだよ？　藁人形は抜いて帰らない」

川島は少しだけ考えて、たしかに、と言った。

「だから、呪われた方は直接的にしろ間接的にしろ、その情報が入ることになる」

「それじゃあ駄目なんじゃないか？　バレちまってる」

「それでいいんだよ。呪いっていうのはさ、相手に知られなきゃ駄目なんだ。オカルト的な表現をするとそれが、呪いが相手に届いた、っていうこと」
川島は釈然としないながらも、先を促した。
「相手はそれを見て、あるいは聞いて、自分は呪われてるって思うだろうね。で次に、誰が自分を呪っているかを考えるけれど、呪ってる方は見られちゃいけないから必死にそのことを隠す。結果、わからない」
そのことに川島は食いついて、わかるかも知れないじゃねえかよ、と言った。まあわからないってことにしておいてよ、と僕は言った。話の腰を折られた気分だ。
「で、とにかく、自分は呪われている。そして自分を呪っている相手がわからないという二つの事実があった場合、呪われている方はどうなると思う？」
川島は唸りながら考えた。僕は答えが出るのを待った。
「あれか？　疑心暗鬼ってやつか？」
川島の口から四字熟語が飛び出したことに僕は驚いたが、そのことを言うと、今度は自分が腰を折る方になるので伏せた。
「そう、それ。考えただけで不健康だろ？　さらに昔はさ、見ちゃ駄目だったわけだから、周りのみんなは非協力的だったと思う。いっきに村八分になった気分だろうね。体調くらいは崩すかも、そうなったら」
たしかになあ、と川島は首を傾げた。あまり、気分のいい話ではないのはたしかだ。
「そして、残された藁人形にも大事な意味もあったり」
「大事な意味？　それ以外に？」
「カウントダウンしてるんだ。今が何日目なのかを」
「どうやって？」
「釘を打つ場所で。最初はどちらかの手足……まあ詳しくは忘れたけど、とにかく日が進むごとに胸に近づいていって、最後は心臓。

これが七日目」
心臓？　と訊いてきたので、僕は、その位置ね、と念を入れた。
「で、どうなるんだ？　心臓に刺されると」
「ストレスがピークに達する」
それだけか？　川島がなぜか残念そうにそう言ったので、僕はその期待に応えることにする。
「儀式の最終目標が、死、だったなら死ぬかも。ごく稀に」
やっぱり！　と川島は興奮した様子で言った。
「どうやって死ぬんだ？　やっぱり藁人形が濡れてたりすると水死するのか？」
なぜ川島はそんなことを訊くのかわからなかった。が、きっとよくないテレビを見たことがあるに違いない。
「いや、一番多いのは首吊りじゃないかな、なんとなく」これは僕の想像でしかないけれど。
「なんでだ？　藁人形が濡れてるんだぞ？」
「藁人形は藁人形だよ。そこに『ただの』って付けてもいい。たとえ、その呪う相手の髪やら血やらを付けていたとしても、それだけだ」
でも、と川島が言おうとしたので、言われる前に僕が言った。
「でも、そう思わない人がいる。この場合だと、呪った人と呪われた人。その呪われた人が死んだ場合、その死んだ人が呪いをどう思っていたかっていうことが重要になる。丑の刻参りの最後には死ぬ、と思っていたのだったら、自分は死ななければいけないんだ、っていう風に思う。強迫観念ってやつ。で七日目、胸に突き刺さった藁人形を見たとき、とうとう自分は死ぬんだ、って思う。きっと悲惨な死に方をするんだ、って思う。だったらそうなる前にと、自殺する」
自殺がイコールで首吊りに直結するというのは、些か想像力に欠けるだろうか。
「呪いで死ぬんじゃないのか」

「いや、これが呪いで死ぬってことだよ。大事なのはさ、呪う方じゃなくて呪われる方がどう思うかってこと。顔写真とかを貼るのは、呪いの対象にその呪いを明確に届けるため。どんなに想いを込めて呪っても、その対象に伝わらなかったら意味がない。丑の刻参りの意味を知っている人には効果あるし、知らない人には効果がない」

信じていない人には、効果は微妙ってところか。

「で」と僕は先を続けた。「このことから何が言えるかというと、呪っている人がいなくても人は呪われるということ。侑子ちゃんの場合はこういうこと」

「ん？」川島は眉を寄せた。「ああ、だからああいうこと言ったのか。わかりにくいこと言ったな」

「まあね」

「じゃあ、我慢できなかったっていうのは？　なにが我慢できなかったんだ？　喉渇いてたわけじゃあないだろ」

言おうと思っていた冗談を先に言われたので僕は少し言い詰まった。

「まあ、侑子ちゃんは、曖昧だったけど、ものすごい破滅的だったんだよ。自分はとんでもないことをしてしまったから、呪われてもしょうがない。むしろ呪われたいっていう、ね」心的状況を記号化するのは難しい。「ていうか、簡単に言うとさ、死にたがってたんだよ」

「そうなのか」

なぜ、そんな風に思ったのかは伏せる。川島が訊いてきたけど、プライバシーだと一蹴した。

「うん。で、死にたいのに自分でそのことを隠して、呪われている所為にして過労死を待ってたんだ。本人は自覚なかったけどね。で思ったんだ。死にたいなら自殺すればいいのに、自分が死ぬ理由を相手の所為にして、その人のことを悪者にしてたんだ。それが我慢できなかった、んだと思う」

「なんだ、自分のことなのに自身なさげだな」

「忘れちゃったよ、そのときの心境なんて。で、少し懲らしめてやろうと思って、意地悪のつもりでそういうことをした」
「お前は……」
「でもまあ、途中でさ、呪われるような人って悪人じゃないんだって考え始めてね」
「いや、悪人だから呪われるんだろ？」
侑子ちゃんのことを悪人と呼んだぞ、こいつ。
「悪いことをした人が必ずしも悪人じゃないよ。それどころか、呪いが成就してしまうような人は良心が強くて、悪いことをしたということに葛藤できる人だよ、きっと。侑子ちゃんだって悪人じゃないだろ？」
「なるほど。じゃあ人を呪うような人間こそ、その葛藤を利用する悪人だな」
「単に可哀そうな人なんだと思うけど。で、そう思ってから、侑子ちゃんのことが可哀そうになって、途中からいい人になってしまった、と自己分析するわけだよ」
「うーん」うんうんと川島は頷いた。あれだもんな、死んだ人間にも想いは届くって教えるあたり、お前にしてはいいことしたよな」
「ん……ま、ね」うまく、平静を装えただろうか。
「ん？　おい、嘘、じゃねえよな？」
できていなかったらしい。
「嘘じゃないよ？　……たぶん」僕は言った。
「ああ？」
「死んだことないから、そんなこと知らない」
「おい！」
「アレだよ。嘘でも本当でも、それを本気にして本当にするのは人間の仕事だよ」僕は遠くの方を見た。
「いいこと言った風にごまかすんじゃねえよ！」
「まあ、いいじゃないさ。そんなことより旅行の話しようぜ」
もともと、僕はそのつもりだったのだ。なのに川島が金曜のこと

を聞きたがったから説明したのだ。脱線もいいところだ。
「そんなことってお前なあ」そういっても、川島は同意してくれた。
「でもなんだ？　いきなり。旅行しようとか、らしくないっていうか、意外過ぎるというか、キャラじゃないというか」
川島は全て同じ意味を言っていた。
「まあ、カーナビも直ったことだし。その調子見を兼ねて、ということだよ」
決して僕の人生を顧みて、なんとなくさみしいなあ、と思ったわけではない。特に侑子ちゃんの家に行ってから、あんなにいい笑顔を眺めてから、なんてわけではない。
「まあ、いいか」川島はあまり考えないで賛同してくれた。「いつにする？」
「近いうち」
「どこに行く？」
「そのうち考えよう」
「……そうだ、な」川島はなぜか、苦笑いをした。「それでいいか。なんとなく、さみしい気がするけどな」
川島が最後、何か不満げに言ったが、小さくて僕にはうまく聞き取れなかった。
けれど、それはきっと些細なことであるのだろう。

その犬が死ぬまで　其の一

腹筋運動がまったくと言っていいほどできなかった。日曜の昼である。旅行に行こうと言っておきながら、その話はてんで進展せず、行き場をなくした気持ちというエネルギーを発散させようと突発的に思いついた行為であったが、それがまったくと言っていいほどにできなかったのだ。いや、まったくというのは言いすぎたかもしれない。ゼロというのではない。しかし学生時代と比較するに、その回数はやはり、まったくと頭に付けて然るべき回数だった。

さすがにショックだった。汗水流して走り続けた、そんな記憶が嘘のように霞んだ。あのときの僕は本当に今の僕と同一人物なのだろうか。そう思った。

自分も知らないうちに老けたものだ……いや違う。ちょっと錆びついただけだ。磨けば光る。やる気を出せばまだまだいける。今だってまだ遅くない。

そうだ、少し体を鍛えよう。僕は冷や汗ものの決意をした。

ただ……疲れるのは厭だった。ジョギングは厭だった。筋力トレーニングも厭だった。球技をやろうにも、そんな思いつきに付き合ってくれるような都合のいい友人はいなかった。とそんなことより、汗なんてものはかきたくなかった。

だったら……まあ……。

散歩でもするか。

と、ことの発端としてはこんなところか。

それから約一時間後、デパートの一階出入り口にてただ茫然と、雨の止むのを待っている僕がいた。どうせなら、と実益と節約を兼ねて買い物に行こうとしたのが、行ったのが間違いだった。車で十分かからない距離を徒歩で四十分かけて移動し、二十分かけて食料品売り場で買い物をし、そうして外に出てみれば、その天候は雨だ

った。しとしとさーさーと、そんな擬音で降るようなものではない。夕立やスコールと比べると劣りはするが、それでも傘なくしては帰れそうもない。そして夕立ちやスコールと違ってこの雨は長く降りそうだった。

「あー……」

やっちゃったよ。なにをやってしまったのか、自分でも具体的には論じかねるが、それでもこの現状はやってしまった感全開の有様だった。

どうしたものか、止むのを待つか。別になにかやらなければいけないこともない。

そう思って三十分ほど待つことにした。三十分というこの時間に特に意味を設けたわけではなく、ただなんとなく、三十分すれば止むだろうという根拠のない予想と、それから、そこらあたりが我慢の限界だろうという自己分析だった。

三十分、待ってみた。雨は一向に止まず、心なしか強くなった気さえする。子供のころより天候を予想するのに長けていた、と自覚する僕にとってこれは些かショックに値した。そしてなにより不思議なのが、腕に付けた時計の針がいまだ十分しか進んでいないことだった。

「むうん？」

おかしい。何がおかしいって、それは十分しか経っていないことがおかしいのだ。僕自身の体内時計ではむしろ一時間近く経っていてもおかしくはないというのに。体感時間と実時間の間にズレが生じている。これは得をしたととらえるべきか。

ピン、と一つ思い出す。

アインシュタインがたしかこんなことを言っていた。「熱いストーブの上に指を置いて待つ一分間は一時間、美女が隣にいて過ごす一時間は一分間。相対性とはこういうことだ」とかなんとか。

つまり、厭なことつまらないことは長く感じて、好きなこと楽しいことは短く感じるということである。

この公式をあてはめるに、今の僕はこの現状をものすごく退屈に思っているということになる。そして事実退屈だった。こんな小難しく考えるまでもなく退屈だった。退屈は人を殺すらしい。雨に殺されるのかもしれない。そんなことを幻思してしまうほどには、雨宿りに飽きていた。たった

傘でも買って帰ろうか。

そう思った矢先だった。

「雨宿りですか？　基紀先輩」

自分の名前を呼ばれたのでおもむろに振り返ると、そこには右手にレジ袋をぶら下げた侑子ちゃんが立っていた。無表情ながらどこか愛嬌のある顔が僕に向けられていた。左手を見ると、そこに握られていたのは白く華奢な傘だった。侑子ちゃんらしいな、と僕は思った。

「いや、本当にありがとう。助かったよ」

「何回目ですか？　その言葉。あんまり多いとこちらとしてもありがたみは薄れます」

雨の中を二人して歩く僕たちがいた。傘は一つ。それは二人を降雨から守るには少しばかり面積が足りず、僕は外側の肩とそれより下をしどろに濡らしていた。それでも僕は、持った傘を侑子ちゃんの方へ寄せる。傘は侑子ちゃんの持ち物なので、その持ち主を雨に晒すのはいただけない。

侑子ちゃんが、それに、と今先に言った言葉をつづけた。

「それに、結局は基紀先輩、濡れてしまってますからね。実際そこまでありがたいものでもないでしょう。無理やり誘ったのはこちらですし」

「そうでもないよ」僕は侑子ちゃんの言葉を否定する。「こうやって女の人と一緒に歩くなんて滅多にないから、まあ、素直に嬉しかったり」

うまいですね、と侑子ちゃんは返した。何がうまいのか、判然し

ないがそれについて言及はしないでおく。
「でもよかったの？」その代わり僕は訊いた。「侑子ちゃんの家、まるっきり反対方向だよ？　僕の家に着いたら車で送るけど、用事とかない？」
「用事なんてあったら端から誘ったりしませんよ。私も暇なんです、要は」
確かに、暇でなかったらこんなことはしてくれないだろうとは思う。でも僕だったらきっと、暇であってもこんなことはしない。面倒臭い。
「それに」侑子ちゃんは続ける。「基紀先輩に訊きたいこともありましたから」
「訊きたいこと？」
「ええ。私にとって、基紀先輩っていう人はなかなか、謎なんです」
……謎？　言おうとして、これ以上オウムになることは止めた。馬鹿に思われたくなかった。
「ふうん。まあ、僕自身としては特に秘密なんてないんだけど」
「まあ先輩にとってはそうでしょうけど、それでも先輩は普通……というカテゴリには入りませんから」
何気にすごく失礼だな、こいつ。思ったが、それは主観だからしようがない。大切なのは、それをやり過ごす大人の余裕だ。
「で、何が訊きたい？」若干怒り気味で僕は訊いた。余裕なんてあったものじゃない。
「え？　いや……まあ、いきなり、何？　て言われても困るんですけど……」うーん、と侑子ちゃんは唸った。「じゃあ、えーと……とりあえず。基紀先輩って川島さん以外に友達います？」
「……」
なんと……答えたらいいものか。
ものすごく呆れた。とりあえず深呼吸。それはため息か、自分では判別できない。
何に呆れたかというと、いない、としか答えられない自分に呆れ

た。
「……いない」
「え？」
訊き返すなと言いたかった。「い、な、い」
「ああ……そうなんですか」まずいことを訊いたな、なんて雰囲気はみじんも感じさせず、侑子ちゃんは本当に、そうなんだ、という感情を以て答えた。
僕はその質問をした侑子ちゃんの真意を汲み取れないでいた。
「どうして、友達いないんです？」
本当に、汲み取れないでいた。
「知らないよ」憮然として、僕は答える。「別にこれといって意味もなければワケもない……よ？」
むしろ、どうしてここまで交友関係がないのか、自分でも知りたい。
「はあ、なるほど。ポリシーがあってのことではないんですね。もっと友達を作りたい、とかは思わないんですか？」
「いやあ」少し、間が空いた。「正直、困ることなんてないから、いらないというか、必要じゃないというか。んーまあ、能動的ではないのは確か」
「むしろどこまでも受動的ですね」
まあそうなるのかな。僕はそう言ってお茶を濁す。「人見知りとかいうんじゃないから、必要があれば話すけど……実際問題、僕はあまり必要とされてないから……ねぇ」
「ふうむ」侑子ちゃんは分析をするように顎に手を当てた。
何か考え事をしているようなので、僕は黙って歩いた。今まで割と気にならなかった雨音が少し気になった。もうすぐ止むかもしれない、とそう思えるほどには弱まってきていた。
「少し、遠回しすぎました」侑子ちゃんはどこかふっきれたような声色だった。
「何が？」

「いえ、要はですね」少し間を空けて侑子ちゃんはこう言った。「携帯の番号等を教えてください、というお願いなんです。これからきっと必要なこともありますから」
「……また、えらい遠回りしたね」
「はい……。プライベートでお願い事をする、というのは……正直苦手でして」侑子ちゃんはため息を一つした。「慣れてなせん」
事実そうだろうとは思う。どちらか、などと言うまでもなく侑子ちゃんは頼られる、お願いされるといった場面が多いようだからだ。そういった人格者だと川島から聞いていた。頼り慣れるということは依存することに連結するから、慣れない方がいいとは思うけれど、世間的にそれはそれとしてなかなか苦労をする場合も多い。頼り切るのも甲斐性だという言葉もあるくらいだ。
まあそうなんだろうね、と曖昧に相槌を打って、こちらこそ、と言った。携帯電話を取り出そうとしたけれど、タイミングが悪かった。今は両手が塞がっている。
「……家に着いてからでいい？」笑みを作って僕は訊いた。
侑子ちゃんはそれを了承してくれた。いくらでも待つと言ってくれたけど、そんなに歩き続けたくはないな、と僕は思った。
そのあとしばらく、僕と侑子ちゃんはいろいろなことを話して歩いた。別に取り留めもない、出身地がどこでそこはどんなところなのか、大学はどこで、どんなことをしていたのか、そんな思い出話が主だった。
そういったことを話して歩いて、比較的時間は早く過ぎていった。
――もうすぐ家に着く。家に着いたらタオルで簡単に体を拭いて、侑子ちゃんにお茶を出して……。そう、話しながら考えて、コンクリートの橋を渡り切る寸前で、侑子ちゃんが唐突に足を止めたので僕も慌ててそれに倣った。
雨で水嵩が増し、濁音が流れるその最中、侑子ちゃんは極めて冷静に、橋の口、ガードレール下にいるそれを睨みつけてこう言った。
「猫ですよ」

「うん、猫だね」
段ボールに「拾ってください」と文字を滲ませながら、その子猫はどこまでも濡れていた。

またありがちな。僕は思う。すでに使い古されて古典にまで昇華し、もうこんなことをする人間はいないと思っていた。というより考えもしない。
拾う人間がいるとでも思っているのか。ちなみに僕は拾わない。もしこんなシチュエーションに出くわしたなら、僕はニャーと一言鳴いて、そして立ち去る。そんな人間だ。
侑子ちゃんもおそらくそれに近い人間だろう。今、猫だ、と言ったのはそれがたまたま目に入ったからだ。猫を見てそれを猫だと思うのは当たり前のことである。
家はもうそこなのだ。このままでいる理由はない。止まった足を再び進めようと、僕はした。
「ところで、基紀先輩」進めようとした矢先、侑子ちゃんは言った。僕の方は見ていない。「猫を飼いたいと思いませんか？」
「いや、特には――」
ない、思わないと続けようとしたけれど、それすら侑子ちゃんは妨げた。
「今なら無料で買い取れる出所を私は知っています。残念ながら血統書はついたりしませんが、見た目かわいくて、それにまだ子猫です。特につぶらな瞳が大変キュート。……どうですか？」
「……ちなみに毛色は？」
「黒、茶、白の三毛です」
どうですか、と侑子ちゃんは再び僕に言うのだけれど、それはどう捉えたところで、目の前にいる拾ってくださいの子猫であった。
「ん、なんていうか」僕は返答に困った。「……飼わないよ？」
「どうしてですか！？」
あまりの声の大きさに僕は驚いた。いきなり張り上げたこともそ

うだけれど、侑子ちゃんが声を張り上げるところなど、想像だにできなかった。しかもこんな路上で。
「どうして……って言われても……ねえ？」
金はかかる、世話は面倒、躾も面倒、あといろいろと問題もある。その問題も、かなり面倒なものなのだ。列挙したものをそれぞれ口にするのは、少しばかり路上では時間が足りない。
「飼いたくなんですか？」侑子ちゃんは僕の目を見た。「かわいいですよ？」
「飼いたく、ないです」その眼力に圧されて、ほんの少しだけたじろいだ。「それほど言うなら、侑子ちゃんが飼えばいいじゃない」
「私の住んでいる家はアパートです。ペットは飼えません」侑子ちゃんは当然のように言う。
事実、当たり前だった。
「だからって僕に押しつけることもないだろう。僕だって飼えないよ」
「猫アレルギーなんですか？」少しだけ残念そうに、侑子ちゃんは言った。
「いやそうじゃないんだけど」
そういうことにしておけばよかった、と言ってから気づいた。
「だったら——」
「いや僕……もう、犬飼ってるし」
これは事実である。いや、少しばかり事情が違うが、問題その一、である。
犬、飼ってましたっけ？　なんて、意外という表情を侑子ちゃんは作った。先日僕の家に来たのは一瞬だったので見なかったのかもしれない。そして侑子ちゃんは僕に訊いた。
「チワワですか？」
と。なぜチワワかそうじゃないのかを訊くのか分からないが、それに僕は違うと答えた。
「雑種犬で、たぶん中型に入るかな。散歩に行こうとして首輪に手

をかけても、その手に噛みついてくるくらいには凶暴、かつ危険」
それはともかく。「そんなわけだから。猫は飼えない」
猫と犬はなかなかどうして、仲が悪い。だから普通は、一緒には飼わない。
「いや……ううん」侑子ちゃんはそれでも納得のいかないような顔をする。
しばらくそのまま、うんうんと唸っていたが、僕がもう行こうと促すと、
「うー、うん？　うんうん」と首を縦に振って、猫に近づいていた。
なんだか、侑子ちゃんらしくない。僕はそう思いながらも、侑子ちゃんを雨に濡らせるわけにはいかないので、それについて猫に近づくことになった。
猫はニャーと一声鳴いた。
「まあ、うん。ね」
そう言いながら侑子ちゃんはあろうことか、その子猫を段ボールごと持ち上げた。
ビチャリ、と段ボールに着いた雨水は侑子ちゃんの服の袖まで濡らす。
「あ、あの……侑子ちゃん？」
僕にはそれが奇行に見えた。狙いが分からなかったからだ。
そんな僕の曇った表情とは裏腹に、侑子ちゃんは極めて清々しい表情をしていた。
「基紀先輩」侑子ちゃんは言う。「私の買い物袋、持ってくれませんか？」
こんな嬉しそうにお願いごとをされては、僕としても断れない。それはいいけど、と曖昧に言葉を濁しながら、僕は侑子ちゃんの袋を持った。
「ありがとうございます」侑子ちゃんは一歩歩きだして言った。「それじゃあ行きましょうか」
「ペットショップ？　それとも保健所？」

「先輩の家ですよ」当たり前のように侑子ちゃんは言った。
「先輩――って僕の家？」当たり前のことを反芻しなければ確認できないほど、僕の頭は混乱している。「いや侑子ちゃん……どういうつもり？　飼わないよ？　絶対僕、飼わないからね？」
そんな僕を、まあまあ、とあしなでながら、侑子ちゃんは僕に訊いた。話題をすり替えた、とも表現できる。
「ところで基紀先輩。先輩は昔宝くじでも当てたんですか？」
「宝くじ？」まだ僕は混乱している。むしろより混乱は深まった。
「当てる当てない以前に買ったことがまずないよ」
「そうなんですか。だったら不思議ですね」
何が不思議か、訊きたかったけれど、黙っているとなぜそう思ったのか侑子ちゃんはさらに訊いてくる。
「じゃあ、先輩の今住んでいる家は、いったいどうされたんですか？　とても働き出して四年で買えるようには思えませんけど。ローンですか？　いや、失礼でしたらいいです」
それは興味か、と僕は訊くと、侑子ちゃんはそうだと答えた。
「失礼とか、そんなんじゃないよ。それから買ったわけじゃないから、ローンなんてものもしていない」
あれはねえ、とほんの少しの遠目に見える家の瓦を見て、僕は言った。
「貰ったんだよ」
「貰った？　ん、ですか？」
「そう、赤の他人から。信じられない？」
「いや……ええ、まあ。だって、手放すほどに汚いわけでもないですよ。中に入って見たわけではないので分かりませんが、それでも築十年は……いってませんよね？　どうして」侑子ちゃんは思案に耽った。
もしかして――そして侑子ちゃんは言う。「出るんですか？」幽霊。
「いや、出ない」きっぱりと僕は言った。「出ないけど……まあ、

幽霊がらみ、にはなるのかなァ」
あの家の元の持ち主を、僕は思いだした。
「聞きたい？」僕は訊いた。
「聞きたい……です」侑子ちゃんは答えた。
さっきまで昔のことを話し合っていたから、そういう気分になっていたのだろう。こういった状態を、栓が緩むと言うのだろうか。内緒にするほどいい話でも悪い話でもないのは確かだ。ということよりも、何よりも、あまり人と付き合うことができないでいる僕に、こうして謎と言って興味を持ってくれた侑子ちゃんを嬉しく思ったのかもしれない。

あれは三年前、梅雨の盛り、寝苦しい夜。
僕はそのころアパート暮らしで、クーラーをつけるにはまだ早いと言って、その亜熱帯の夜を寝汗とともに過ごしていた。
ふと目を開けると、天井すれすれに、どこかで見たような爺さんが正座して浮遊していたのを見つけた。
はじまりとしては、これが本当のはじまり。

その犬が死ぬまで　其の二

その日は、いやその夜は、とにかく暑かったことを覚えている。窓を全開にしてあるにも関わらず、夜風は全く入ってこなかった。

「あっ――つう」

何ひとつ動作というものをしていない。それなのに、息は乱れ汗をかく。ダイエットには最適な気候かもしれない。そんなことを思った、というわけではなかった。思ったことは、ただ暑い――それに尽きた。

クーラーを点けようか本気で迷った。が、それにはまだ及ばない。及んではいけない。これしきの暑さで楽をしていては、真打と言えるほどの猛暑が来たときにきっと死んでしまうだろう。だから今は、ソフトライディングのつもりで意地でもクーラーのスイッチは点けないでおこうと決めた。

そうやってある種の腹をくくると、自然と暑さは引くもので――いや引くというより許容できるようになるので、僕は深呼吸をひとつして寝入りに入った。

深く、深く沈んでいくような、もしくは上下に揺らいでいるような、そんなイメージ。

呼吸を乱さず、何も考えず、ただ自分の寝息に任せる。そうすることでやっと、僕に心地の良い微睡みが訪れた。それを深くに感じながら、やっと寝られる。とそう思った。最後にみた時計の時刻が午前二時だったから、その思いは万感であった。

おやすみ、と自身に呟いて僕の意識はそこで途切れようとした。

が結果として、途切れることはなかったのである。長いこと、長いこと、僕は境界の間に生殺しとして置かれた。寝たい、眠れない、寝たい、眠れない。ああ寝たい。じっと目を瞑っていても、どうしても眠れることはなかった。そのうちに忘れることができていた、だるったい暑さ、それさえもぶり返した。

もうダメだ眠れない。僕はとうとう観念し、瞑っていた目を開けることにした。決意したなどと能動的なものではなく、ただ受動的に目を開けさせられたと言った方が正しいかもしれない。とにかく僕は目を開けて、そして奇妙な光景をその中に入れることになった。

まず初めに見たのは膝から下の脚だった。爺くさい股引を穿いて、皺だらけの足を晒していた。それが僕の真上に浮かんでいた。そこから尻、腕、と見えていき、最終的に僕が見たのは、今にも死にそうな顔をした……老人の顔だった。股ぐらからそれを覗かせていたので、思わず僕は噴き出したくなった。それを寸でで止めて、すぐに息を殺した。

幽霊というものは気がついてくれる者に憑くのである。その理由は簡単に想像できると思う。

死者は基本的に暗闇で、そして生者は光だ。暗闇の隣に暗闇があったところで、暗闇はどちらも気がつかない。光はさらに輝く光に目を奪われ、やはり暗闇に目がいかない。暗闇はいつまでも独りだ。

だから、きっと寂しいのだろう。

それに同情しようとするのならば、それは間違い。この世界は生者のものだからだ。死者としてこの世界に現存してしまえば、すべからく異物とするべきである。生者はあくまで光であり、光自体には影はできない。光と暗闇は、まったくの別物だ。

だから、たまに僕のように暗闇を見つけてしまう人間にとって、見つけられることは迷惑の他ないのである。

そのときもそうだった。だから僕は息を殺して動かなかった。まばたきさえしなかった。僕は何も気づいていない。僕とあんたは違うものなんだ。ただそれだけを思ってやり過ごした。

いや、やり過ごそうとした。その爺さんはこともあろうに僕をその股ぐらから覗き、僕と視線を交叉してきた。僕はというと、その視線をかわせるわけもなく、ただ真っ正面に受け止め続けるしかなかった。蛇に睨まれたカエル……とは少しばかり違うけれど。

その爺さん、何が不思議かそのままの姿勢で高度を下げてきた。

せまる脚、せまる尻、爺さんの。その顔はだんだんとはっきりしていき、皺の数まで数えることができるほどになった。それでもなお下がり続けて、最終的に僕は爺さんの股で顔を挟まれる形になった。気持ち悪い。素直にそう思った。ここでおならでもされたら、なんてことを思ってぞっとした。

下がることはなくなると、今度は腰を曲げて顔だけでせまってきた。もういやだ。僕は飛び起きそうなのを懸命にこらえた。

もうこれ以上近づかなくてもいいんじゃないか？　これ以上近づく意味は？　お願いだからもうやめて。

これ以上近づけば、僕はこの爺さんと接吻してしまう、と唇をわななかせてしまったところで、ようやくその爺さんは近づくのをやめた。

『あんた、わしのこと、見えとるね？』

そしてしゃがれた声でこう言った。

「見えてない」

即答……してしまった。その後の後悔、後の祭り。口を利いてしまった。爺さんは余裕をなくすために近づいてきたのだろう、ということを思った。やられた。

『嘘つくなや』にやりと笑った。

「嘘じゃない」

『口を利いとる』

「実はこれ寝言なんだ。あんたのことは見えてない」

見えているのは天井だけ。

だからさよなら、お元気で。

『んなこと言うとるとおめぇ』意味深に笑われた。『チンコもぐぞ？』

そう言って爺さんは滑らかに、僕の下半身へと移動……しようとした。

「やめて！　お願い！」

その行動を僕が抑えた。言いながら上半身を跳ね上げた。

伸ばした腕はすり抜けた。その勢いは殺せず、僕は体ごと、爺さんの体をすり抜けた。後ろに視線を向けると、したり顔の爺さんがいた。またしてもやられたと思う。幽霊は物を触れない。チンコなどもぎ取れるはずがない。

後ろを振り返ると、爺さんはしたり顔だった。

僕は大きく息を吐いて、その場で反転、その爺さんと向き合うことにした。

『ほれ、見えとるやないか。え？』

この爺さん、なかなかの強者だ。僕は何かをあきらめたようなため息を漏らした。

「で、爺さん。何か用？」えらく仏頂面になった。

『用ってほどのことじゃあないんじゃ。ただほんのちょっとのヒマつぶしじゃい』楽しそうに爺さんは答えた。

こんな幽霊は初めてだ、とそのときの僕はそう思った。幽霊とは亡者である。イメージ的にはほとんどそれに近い。それがどうだ、この幽霊はなんとも生者のように笑うのだ。

「ヒマを潰すっていうなら早いとこ成仏しなよ。あんまりこっちにいて良いことなんてないんだから」

『成仏……のう……』そんな爺さんは首を傾げた。

「どうしたの？　仕方がわからない、てなら協力ぐらいはしてあげるけど」

『いや、そうじゃないんじゃ』

「じゃあ何？」

『成仏の仕方がわからんのはそうなんじゃが……』爺さんはむず痒いような顔をした。『わしゃまだ生きとる。から、成仏は……まだ早ぇわ』

「は？」阿呆の面、だっただろう。「嘘つくな、あんた幽霊だろ？てことは、つまり……死んだんだろ？」

死んだという表現に差し障りがあったが、あえて僕はそれを使った。

『いやあ……自分でもようわからんのじゃけど、わしゃまだ生きとるのは確かなんじゃ。わしの体はまだ家で寝とる』
「ああん？」
そのときは、爺さんの言わんとしていることがますますわからなくなった。
『んとな、わしゃあ家の布団で寝とるつもりじゃったんじゃが、起きたら目の前でわしが寝とったんじゃ。それでよ、わしはなにしとったんかというと、わしの目の前で浮いとったんじゃ』
状況がよくわからないが、まだ説明の続きみたいなのでとりあえず僕は頷くことにした。
『んで、どうも体は軽いからってんでいろいろ動きまわっとたら、そのうち屋根ぇ突き抜けた。こら可笑しいと思ってよ、外歩いとるやつの頭ぁド突いてみたら、やっぱりすり抜けた。起きとる人にはわしのこと見えてないらしくてな、そんな風に遊んどったら、次第に飽きてきてのう』
嬉しそうに爺さんは自身がたった今体験したらしいことを語る。
だいたい事情が呑み込めた僕は、目の前にいる老人の適応さ加減に感心しつつ、調子に乗りすぎだ、とそう思った。
『そいで、誰かわしんこと見えるやつおらんかと捜しまわっとったら、あんたんとこきたんじゃ』
そうして、爺さんは僕のところまできた経緯の説明までをして、大きく頷いた。まるで自分自身で現状を把握しているみたいだった。
ああそういうことか。全てを聞き終えた僕はそんな風な顔をした。
『なんぞわかったんか？』爺さんは僕の顔を覗き込む。
顔が近かったので、僕は距離を置いた。
「まあ、だいたい」
同じような話が昔話であった……気がする。
「有体にいえば、魂が抜けてる、ってことになるんだろうなあ」
『そのまんまじゃろが』爺さんは顎をしゃくってみせた。
もっと上手なことを言ってくれると期待したのだろう。もっとも

な突っ込みだ。だからって、そのまんまなのだから仕方がない。
今までこんなものは見たことがなかったためにはじめは戸惑ったけれど、なるほど納得した。
生きているように見えたのは死んでなかったからなのだ。
「ま、心配しなくても体の方が起きれば嫌でも戻るよ、きっと」
絶対心配してないだろうな、なんて思いながら、それでも社交辞令的に言った。
『おうそうかい？　まあ、あんま心配なんてしてなかったけんども』
やっぱりだった。
爺さんはそう言って笑った。
それでも言っておかなければいけない気がした。
「ただ……爺さん」
『ん？　なんじゃ、変な顔して』
「……いや、うん。……ただ、もし起きて覚えてたら気をつけてほしいけど、爺さんあんた、もうすぐ死ぬよ」
僕が聞いたことのある昔話はこうだった。若者が夜歩いていると、人魂を見た。それは近くに寄ってきて、若者に語りかける。その話の内容は憶えていないが、人魂には顔があり、そして若者はその顔に見覚えがあった。話が終わり、人魂はふらふらと道を逸れて行ってしまったが、気になった若者はその人魂を追いかけた。人魂は一軒屋にたどりつき、窓からその中に入っていった。そこは老人がひとりで暮らしている家で、窓から覗くと、その老人はおいしそうに餅を食べていた。若者はそれを見て、「あれはこの老人の魂だったか。生きているうちに魂が体から抜け出すようになると、もう長くないと聞く。きっとあの老人は近いうちに死んでしまうだろう」と思いながら、その場を去った。そして老人は次の日、本当に死んでしまった。
なんて、訓話でもない、何を伝えたいのか全くわからない昔話であるが、その話は確かなリアリズムを持ってそのときの僕に蘇ったのである。

『ああ……その話ならわしも知っとるわ』
死ぬと言った根拠を求められたので、今の話を爺さんに聞かせてやると、のんびりに爺さんは言った。
「あんまり慌てないんだな」素直に僕は思った。
『そんな気は薄々しとったんじゃ』ふふん、と爺さんは笑う。『でもまあ、気をつけることもないわな。なんせ、こうなって死ぬなら寿命じゃろて』
「もっと生きたい、とかって思わないの？」その言葉は自然と出来ていた。
爺さんは、若造が、なんていう小馬鹿にした顔をしながらそれに答える。
『婆さんを向こうに待たせとるしの、別にこっちにゃ残すことなんてないわい』
そういうものなのだろうか。
『それにな、暇なんじゃよ』
爺さんはそう言って、今までで一番朗らかに笑うのだった。それが本心だから、かもしれない。
『こうやって幽霊にでもならん限り、話し相手もおらん老後じゃ。子らもどっか行ってもうたしな』
それは僕としても……胸が痛む言葉だった。
ひとり息子として生まれておきながら、僕は実家を出て暮らしている。
『なあ、あんた、名前は？』爺さんは僕に訊いてきた。
「洞下……洞下基紀。……そういう爺さんは？」
『わしか？　わしは善治っちゅうんじゃ。五丁目で村重っていう表札をかけとる……と』
爺さんはそこまで言うと、外を見て、そしてつまらなそうに口を尖らせた。
釣られて僕も同じ方を見ると、空が白んでいくのがわかった。夜が終わったのだ。

『あれぁ、時間かの。年寄りは朝が早ぇもんでな、ここらで失礼させてもらおうかい』
爺さんはまた笑ってみせ、壁をすり抜けて行こうとする。
その方向に家があるのだろう。
その別れ際、胸が痛んだからだろうか。
『死ぬまで暇なんじゃ。もしわしが憶えとったら、またきてええか？』
その言葉に僕は、
「お好きなように」
なんて答えてしまった。
それが、今の家の、事の始まり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1352l/

気がつかれた世界系

2010年11月17日21時10分発行